MUSEO ACADEMIAE
大学博物館等協議会ニューズレター
No.27 June 2025

Contents

1 ごあいさつ
北海道大学総合博物館長　坪田敏男

2 大学博物館等協議会2024年度大会・第19回日本博物科学会開催報告
琉球大学博物館（風樹館）　助教　平良　渉

3 東京科学大学博物館ミニ展示「インド陶芸界の父となった卒業生グルチャラン・シン」開催
東京科学大学博物館　研究員　山中章江

5 愛知学院大学歯学部歯科資料展示室・臨床教育研究棟サテライト展示スペースの企画展
愛知学院大学歯学部　事務職員　石川明里

7 懐徳堂300年と大阪大学
大阪大学総合学術博物館　准教授　横田　洋

8 企画展「ダイヤモンド・プリンセス号の長い航海—記録と記憶の継承と創造」の開催
長崎大学熱帯医学研究所教授、附属熱帯医学ミュージアム館長　飯島　渉

9 香川大学博物館が「指定施設」となる
香川大学博物館　館長　寺林　優・北條充敏・井上幸恵

11 企画展「宇宙からの手紙　隕石の発見からはやぶさ2の探査まで」開催
京都大学総合博物館　助教　竹之内惇志

13 大阪大学ミュージアム・リンクスと適塾記念センター
大阪大学ミュージアムリンクス兼適塾記念センター　准教授　松永和浩

ごあいさつ

北海道大学総合博物館長　坪田敏男

2025年度から大学博物館等協議会・日本博物科学会の会長をつとめることになりました坪田です。北海道大学（以下、北大）総合博物館長になったのが2年前ですので、本協議会・科学会での経験も2年ばかりで、過去の経緯や流れを十分には理解できていませんが、何卒よろしくお願い申し上げます。私自身は、獣医学、とくに野生動物医学という分野の中で、クマ類をはじめとする大型哺乳類の生態、生理および感染症の研究を行なっていて、博物館でも哺乳類関係の展示に関わっております。昨年は北大総合博物館で「ホッキョクグマ展」の企画運営を担当しました。

さて、大学博物館等協議会は、今年で28年目を迎え、加盟館数も40を超える数となりました。2年ほど前に行われた博物館法の改正など、我々を取り巻く環境は変化しつつありますが、我々の目指すところに変わりはないと認識しています。当然、各大学の事情や考え方、さらには財政の違いから各館の特徴や規模、予算などには大きな幅があるのだと思います。昨年のニューズレターで西秋良宏前会長（東京大学総合博物館長）が書かれているように、協議会として一つの方向を目指すのではなく、各大学の実情に応じて各々の館が目指す目標を掲げ、個性的でユニークな博物館の存在意義を示されることを歓迎いたします。その中で、大学博物館のあり方についてさまざまな問題や課題があるのは重々承知しております。その情報交換・共有の場として本協議会が役割を果たすことが重要と考えます。

また、日本博物科学会は、2006年に設立された比較的新しい学会です。私の先輩でもある元北海道大学総合博物館長であった藤田正一先生の発案により設立した学会と聞いております。藤田先生が設立当時に紹介された大学博物館の存在意義を大別すると、以下の6項目が示されていました。1）教育研究機関の博物館である 2）教育の現場として利用するべきである 3）学術上重要な標本がたくさんある 4）標本の後ろに多数の研究者がいる 5）大学の社会に開いた窓口であり、広報の場である 6）大学の地域貢献の拠点である。改めて、これらの事項を重要視して、これからの大学博物館ならびに日本博物科学会の活動に活かしていきたいものです。

最後になりましたが、本年度の九州大学での第28回大学博物館等協議会・第20回日本博物科学会で皆様とお会いできることを楽しみにしております。ぜひ福岡の地に足をお運びください。

大学博物館等協議会2024年度大会・第19回日本博物科学会開催報告

琉球大学博物館（風樹館）　助教　平良　渉

第27回となる大学博物館等協議会2024年度大会および第19回日本博物科学会が、2024年６月27日（木）・28日（金）に琉球大学50周年記念館で開催され、23館から57人の参加があった。風樹館での開催は2021年度に予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大により延期され、３年越しでの開催となった。本報告では、準備ならびに開催の記録、シンポジウムのテーマとした「大学博物館との連携で拓く地域・学術の未来」にかかる議論について報告する。

開催準備における新たな取り組み

私が琉球大学博物館（風樹館）へ着任したのが2023年９月で、そこからの準備となり館のこともまだよくわかっていないような状況での準備となり、関係者の皆様にはご迷惑をおかけしてしまい、この場をお借りしお礼と謝罪を申し上げたい。そのような状況でしたので、準備にあたり作業の効率化を目的に前年度より以下の３点で変更を行った。それらについて以下にまとめる。

①申し込み方法の変更

前年度までは、参加の有無を館ごとにとりまとめ申し込みを行っていたが、本大会からは個人ごとにフォームに入力をしていただいた。運営側としては、参加情報の取りまとめの作業が効率化され、参加資格の確認などの作業がスムーズに行えた。一方で、個人ごとの申し込みに変えたことで、各先生方における作業負担が増えてしまったことと、館ごとで取りまとめる作業がなくなったことにより館ごとの参加者の把握が難しくなった部分もあったようである。今後の開催では、より良い方法や運用方法を検討していく必要があるだろう。

②支払方法の変更

本大会からは、参加費の支払い方法を事前振り込みのみとさせていただいた。変更した理由は、開催当日のお金の管理等に割ける人員がいなかったということのほかに、インボイス対応の側面もあった。本協議会並びに学会は適格事業者ではないため、適格請求書の発行ができず、振り込みの証書を支払いの正式な記録としていただく狙いがあった。機関によってはお手続きが難しいところもあったようだが、ご協力いただくことで適切な予算管理を行うことができた。ご協力に感謝申し上げる。

③ポスター発表の開催取りやめ

本大会でもポスター発表の希望があったものの、口頭発表も含めた全体の発表数が少なかったため、ポスター発表から口頭発表に切り替えさせていただいた。次回大会では発表数が増加し、より多くの発表を拝聴できることを期待します。

シンポジウム「大学博物館との連携で拓く地域・学術の未来」

６月27日（木）には「大学博物館との連携で拓く地域・学術の未来」をテーマにシンポジウムを開催し、西田睦学長（琉球大学（当時））、伊澤雅子館長（北九州市立自然史・歴史博物館（当時））、佐々木健志助教（琉球大学（当時））、上井幸司准教授（室蘭工業大学）からご講演をいただいた。国立沖縄自然史博物館の構想や大学博物館と他館との連携についてなど、幅広い話題提供があった。それらを受けてパネルディスカッションでは、博物館の収蔵スペースが不足し、資料を廃棄せざるを得ない状況が生じている問題点についても議論や情報共有が行われた。理系文系問わず、実物資料の重要性と収蔵スペースや予算確保の必要性などを改めて認識させられる機会となった。

おわりに

大会の開催校になると、特別講演もしくはシンポジウムの企画立案、博物科学会のプログラム作成、大会開催準備、当日の大会運営など非常に多くの仕事を行うことになる。当館のような正規職員が教員１名のみで、正規の事務職員もついていないような小規模館が担当することになってしまうと、非常に厳しい状況になる。今後の開催にあたっては、開催の主担当は中規模以上の館が担い、小規模館はプログラム（要旨集）の作成な

どのサポート業務にあたるなど、開催校選定には配慮やサポートが必要だと感じた。このような状況でも無事に大会を終えられたのは、会長校であった東京大学総合博物館の西秋館長をはじめ、多くの関係者の皆様、参加者の皆様のご協力をいただけたからである。重ねて感謝申し上げる。

特別見学会での集合写真

ミニ展示「インド陶芸界の父となった卒業生グルチャラン・シン」開催

東京科学大学博物館　研究員　山中章江

2024年10月1日、東京工業大学と東京医科歯科大学が統合し、東京科学大学が誕生しました。それに伴い、東京工業大学博物館は東京科学大学博物館へと改組しました。

東京科学大学博物館は、ミニ展示「インド陶芸界の父となった卒業生グルチャラン・シン」を2024年11月15日（金）から12月19日（木）までの会期で開催しました（図1）。同展の開催に至った経緯と概要、また関連して開催したイベントを報告します。

英領インドのレンガ･タイル工場で働いていたグルチャラン・シン（1896-1995）は、結婚の条件として日本の東京高等工業学校（旧東工大の前身）の窯業科で工場生産を学ぶことを提示され、1919年に来日しています。その背景には、日露戦争に勝利し東アジアに広まった日本への憧れと、本学の手島精一校長（当時）による留学生を積極的に受け入れる体制づくりがあるようです。シンは日本滞在中、柳宗悦や本学卒業生の河井寛次郎と濱田庄司らと交流を深め、手仕事としての陶芸にも目覚めています。1921年、東京高等工業学校窯業科選科を修了し、柳の勧めで韓国と中国を旅した後1922年にインドに帰国しています。その後、シンは陶芸工房を立ち上げ作品作りに励みながら、インド人による産業用セラミックの普及に重要な技術訓練機関を設立し、インドの近代陶芸の礎を築きます。

2022年12月、グルチャラン・シンの生涯と作品を紹介

図1.東京科学大学博物での展示の様子

図2.寄贈を受けた陶芸作品4点（詳細は文中①、②、③、④参照）

するドキュメンタリー映画を制作するため、映画制作に携わったニルマル・チャンダー監督が来館しました。残念ながら、シンが在籍した蔵前キャンパス時代の資料は1923年の関東大震災による大火で焼失してしまいほとんど残っていませんが、ニルマル監督はシンが本学で学んだ時間の大切さを記録するため、現存する窯業科関連の文書類、大岡山キャンパス、広瀬茂久名誉教授（当時、資史料館室長）へのインタビューを撮影しました。そして、2023年、ニルマル監督から完成した映画“The LOTUS and the SWAN”がインドで公開されたとの連絡を受けました。

東京科学大学博物館は、窯業科が存在していたことさえも忘れつつある今日の学生・教職員に、インドの近代陶芸の礎を築いた卒業生の歩みを紹介したいと考え、本学で映画“The LOTUS and the SWAN”の上映会を学生支援センターと共催で企画しました。その際、より深くシンの活動を理解する機会となることを期待し、映画を制作したニルマル監督と、シンが1991年に設立したデリ・ブルー・ポタリー・トラストの理事アヌラダ・ラヴィンドラナス女史をインドから招待しました。

上記の企画とともに、東京科学大学博物館はシンの陶芸作品４点とシンに関する書籍２冊の寄贈を受けました。また、2022年の撮影時にはなかった資料（シンの入学願書）も見つかったため、上映会のイベントに合わせてミニ展示「インド陶芸界の父となった卒業生グルチャラン・シン」を開催しました。展示内容は、寄贈を受けたシンの作家性を表す陶芸作品４点（図２）とシンに関わる資料です。以下、その詳細です。

〈陶芸作品〉

① 蓮の大皿（1969年制作。炻器。直径26.6cm）

② ティーカップセット（1970年制作。炻器。カップ直径14.4cm、ソーサー直径9.9cm）

③ 茶色い壺（1977年製作。炻器。高さ21.3cm）

④ 青い壺（1980年製作。炻器。高さ21.3cm）

シンは、映画のタイトルにもなっている蓮や白鳥をモチーフとして好み、デリ・ブルーといわれる独特の青を陶芸作品に用います。

〈シンに関わる資料〉

・「研究生選科生入学願書」（聴講生：1919年９月、選科生1920年１月）

・窯業科の学習過程が記された「東京高等工業学校規則」（1920年）

・選科生及び聴講生規則、在学生名簿、選科卒業生名簿が記された「東京高等工業学校一覧」（1919年度、1920年度、1930年度）

・卒業アルバム写真（1921年）

シンは、１年間の聴講生時代に日本語を学び、その後窯業科選科生として入学しています。アヌラダ女史によると選科生の入学願書に記載されている名前と住所はシンの直筆で、朱の「EK」は「Ek Onkar」と読み「唯一の神」という意味を有します。朱の「EK」はシク教の

図3.アヌラダ女史による博物館ツアーの様子

シンが独自に作った印鑑と思われ、日本文化に親しむシンの姿を窺い知ることができます。

2024年11月15日（金）には、アヌラダ女史による博物館展示の解説ツアー（図３）、映画上映、監督への質問会、交流会の４部構成でイベントを開催しました。イベント当日の参加人数は70名。学生・教職員のみならず、映画制作に協力した国内研究者も参加し、時間制限一杯まで対話が弾む盛況な時間となりました。

今回の展示及びイベントは、東京職工学校（旧東工大の前身）の創立に関わり窯業学を開講したゴッドフリート・ワグネルの「美術と工業は決して離れてはならない」という考えの国際的な広がりに触れる良い機会となりました。今後も東京科学大学博物館は、旧東京医科歯科大学も含めた両大学の歴史資料の蒐集・調査研究に取り組み、展示などを通じて本学の誕生に至る歩みと歴史的な意義を伝える活動を行なっていきます。

愛知学院大学歯学部歯科資料展示室・臨床教育研究棟サテライト展示スペースの企画展

愛知学院大学歯学部　事務職員　石川明里

愛知学院大学歯学部には1年生から4年生が基礎歯科医学を学ぶ楠元キャンパスと、そこから徒歩10分ほどの距離に5、6年生が臨床実習を行う末盛キャンパス（歯学部附属病院併設）がある。一昨年の末盛キャンパス既存校舎の建て替えに伴い、新しく建てられた臨床教育研究棟1Fエントランスホール入り口に、どなたでも見学できる展示スペースを新設した（図1）。楠元キャンパスにある歯科資料展示室に対して、臨床教育研究棟にある展示スペースは、歯科資料展示室のサテライトとして位置づけている。展示ケースの数は5つと決して広いスペースとは言えないが、どのようなコンセプトで展示するか、また数ある標本の中からどれを選ぶかなど、限られた空間だからこその展示の楽しさがある。

歯科資料展示室の運営は歯学部の臨床系講座の教員2名と基礎系講座の教員4名、そして事務職員2名で構成される歯科資料展示室委員会が行い、定期的に開催される委員会で展示の企画などを話し合っている。ここでも小さな組織だからこその良さがあり、毎回和気あいあいと柔軟な意見交換ができている。歯科資料展示室の館長は歯学部長が兼務する。現在の歯学部長は、発生学や解剖学の教鞭をとっていることもあり、展示室への思い入れが強い方である。

ここからは臨床教育研究棟のサテライト展示スペースの取り組みを紹介する。1回目の企画展は、コロナ禍で歯科資料展示室が開館できなかった時期に収集した動物の頭骨レプリカ標本を展示した。新しい展示ケースに標本を入れたときに、どんな雰囲気に仕上がるかをみる試験的な展示でもあった。展示した標本は、ラテン語で「溝のある歯」を意味するソレノドン、管歯目で現生種はただ

図1.サテライト展示スペース

図2.博物館実習生の髙梨さん（左）と石川（右）

1種のみのツチブタ、1936年に絶滅したフクロオオカミなど、委員会メンバーの趣味趣向が窺える個性豊かな展示になり、新しいサテライト展示スペースの始まりを印象づけるものとなった。

展示をより楽しんでもらうための企画として、展示物のクイズと賞品を用意した。クイズは「ソレノドンの歯の溝は唾液中に含まれる何を獲物に注入するためでしょう?」「ツチブタの歯の象牙質を覆っている組織は何でしょう?」と、今回の問題が専門的過ぎたのか？参加者は残念ながら多くはなかった。正解者への賞品は、愛知学院大学の日進キャンパスで採取した新鮮な「はちみつ」とした。

2回目の企画展は、学芸員資格取得のため博物館実習にやってきた髙梨佑真さん（高知大学4年生：2024年当時）に企画をお願いしたところ、快く引き受けてくれた。生物好きなこともあり「哺乳類のアリ食への収斂進化」というタイトルで、アリを食べるために歯を欠いた哺乳類たちの頭骨標本と系統樹を用いて「収斂進化」について見学者にわかりやすく解説して頂いた（図2）。その展示物の一つがオオアリクイの頭骨である。オオアリクイは、アリを舌で舐めとって捕食する哺乳類で、咀嚼の必要がないため歯もなければ咀嚼筋も無い。言うまでもなく、歯学部の教員はヒトの歯や口腔の機能を最大限に生かすため治療や研究に打ち込んでいるが、野生動物の中には自然界で生き残るために、アリを食べることを選択し、そのために歯を無くした動物がいることに興味を抱いた。ヒトの構造とは全く異なる哺乳類を歯学部キャンパス内で展示するという本企画は歯や口腔の機能を多角的にみることができる素晴らしいものとなった。展示物クイズでは、主にシロアリを捕食するアードウルフと肉食に近いキツネの頭骨標本を並べて展示し、今回は、回答しやすい「どっちがアードウルフでしょう?」の選択設問とし歯の形態や本数の違いから正答を選んで頂いた。

図3.浅原正和先生（愛知学院大学教養部生物学教室）

そして、2025年4月より開催している3回目の企画展では、咀嚼するにもかかわらず進化の過程で歯をなくしたカモノハシの歯を取り上げた。企画は「カモノハシ先生」こと浅原正和先生（愛知学院大学教養部生物学教室）で、タイトルは「歯のないカモノハシの“歯”の進化」となった。カモノハシが歯をなくしてまで獲得した大切な機能の説明を含め、浅原先生のカモノハシ愛に溢れた展示となっていて、見る人を魅了するに違いない（図3）。

現在、愛知学院大学歯学部末盛キャンパスには、歯学部附属病院（南館・西館）と臨床教育研究棟があり、2026年春には医科・歯科の連携を強化するために新たな診療棟（北館）が完成予定である。臨床教育研究棟に隣接する公開空地やカフェは地域住民の散歩道として、また治療に通う患者の憩いの場として提供されており、歯学部の縁側的な存在になっている（図4）。歯科資料展示室のサテライト展示スペースもその一端を担うべく、今後も精力的に活動を続けていく所存である。

お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りいただき、コーヒーを片手に展示ケースを覗いていただけたら幸いです。

図4.　臨床教育研究棟と公開空地

懐徳堂300年と大阪大学

大阪大学総合学術博物館　准教授　横田　洋

2024年は大阪の学問所懐徳堂が創設されて300年の記念の年であった。

懐徳堂は1724年（享保9年）に五同志と呼ばれる豪商5名が資金を拠出し、町人のための学校として設立され、2年後の1726年（享保11年）に幕府の官許を得た学問所である。幕府に正式に認められた後も民間の義金によって運営が行われた半官半民の学問所で、江戸の昌平坂学問所や各地の藩校のように武士が学ぶための学校ではなく、町人が中心となって学び、運営されていた。学則では「書生の交りは、貴賤貧富を問わず、同輩たるべき事」と身分を問わないことが明記され、学費の規定もあったが、貧しい者は紙一折、筆一対でもよいとするなど多くの人々に開かれた学問所であった。

学術的な水準はきわめて高く、初期の懐徳堂では初代学主の三宅石庵を中心に五井蘭州や中井甃庵等の学者が活躍した。特定の学派にとらわれない姿勢で、「鵺学問」と揶揄されることもあったが、町人の学問所らしい自由で柔軟性に富んだ学問を展開した。『出定後語』等を著した異才富永仲基も懐徳堂出身の学者である。

懐徳堂の最盛期は中井竹山・履軒兄弟が活躍した18世紀後半で、兄の竹山は古典の研究を基礎としながら同時代の政治経済にも明るく、老中松平定信に会見し政策を提言するなど幅広い活動を行った。弟の履軒も経学を本分としながら漢学の範疇を超えた学問を展開し、西洋天文学、解剖医学などにも関心を示し、また顕微鏡を作製し、それを用いた観察記なども残した。

懐徳堂は明治維新期に一度閉校するが、明治末に市民のための学問所として懐徳堂を復興させる機運が高まった。歴代の学主を務めた中井家の子孫である中井木菟麻呂や朝日新聞記者で漢学者の西村天囚などの尽力で、大阪財界の支援を受け1913年（大正2年）に財団法人懐徳堂記念会が発足した。1916年（大正5年）には学舎として重建懐徳堂が竣工し、古典を中心とした研究教育が行われ、大阪の特に人文系の学問を支えた。

1945年（昭和20年）の大阪大空襲で重建懐徳堂の講堂は全焼するが、懐徳堂創立期からの貴重な資料は耐火性の鉄筋コンクリート造の書庫に収められていたため、焼失を免れた。1949年（昭和24年）に36,000点に及ぶ資料は懐徳堂文庫として懐徳堂記念会から大阪大学に寄贈され、懐徳堂記念会事務局も大阪大学文学部内に移され、江戸時代から続く懐徳堂の運営は大阪大学が主体となって進められるようになった。現在も懐徳堂記念会は講座などさまざまな事業を通じて、広く市民に開かれた学問所としての役割を担い続けている。

懐徳堂は300年前の江戸時代に創立した学問所であるが、明治維新で閉校した後も復興し、現在でも学問の拠点として継承されている大阪の学問の象徴である。緒方洪庵の適塾とともに懐徳堂を精神的源流と位置づける大阪大学では文学部・人文学研究科を中心に全学を挙げて、その300周年記念事業に取り組んだ。

懐徳堂創立300周年記念展覧会　会場入口

懐徳堂創立300周年記念展覧会　展示風景

総合学術博物館も、10月12日から12月7日までの会期で、「懐徳堂って知ってはる?―大阪大学が受け継ぐなにわ町人の学問所―」と題して、懐徳堂記念会から大阪大学へ寄贈された資料・作品を中心に一般には初公開となる資料も含め300年の歴史を一望する記念展覧会を開催した。「書生の交りは、貴賤貧富を問わず、同輩たるべき事」と定めた『宝暦八年定』や中井竹山が松平定信に献上した『草茅危言』の手稿、中井履軒が作製した木製天図や人体解剖図『越俎弄筆』などの懐徳堂文庫を代表する資料を展示。中井履軒が日本の昔話である猿蟹合戦を中国古典風に紹介する賛を書き、中国風の衣装を身に着けたカニやウス、クリ、ハサミ等が描かれた『解師伐袁図』をその周辺作品とともに展示するなどの試みも行った。大正期の200周年の式典に当時内閣総理大臣であった若槻礼次郎から送られた祝辞なども今回初公開された。

期間中には300周年記念のシンポジウム、レクチャー、落語会なども開催、一連の事業はNHKをはじめとする在阪各放送局の番組で紹介され、大手新聞社からも軒並み取材を受け紙面で紹介していただき、300周年の記念にふさわしい事業を展開できたと考えている。市民に開かれた学問所としての役割は懐徳堂記念会そして大阪大学が現在でも継承している。その役割の中核を担う総合学術博物館は、今回の懐徳堂300周年を機に改めて社会・市民に開かれた大学にふさわしい事業を展開していきたいと考えている。

企画展「ダイヤモンド・プリンセス号の長い航海―記録と記憶の継承と創造」の開催

長崎大学熱帯医学研究所教授、附属熱帯医学ミュージアム館長
飯島　渉

熱帯医学ミュージアムは、長崎大学熱帯医学研究所に附属するサイエンス・ミュージアムとして、2008年4月の開設以来、熱帯感染症やNTDs（Neglected Tropical Diseases=顧みられない熱帯病）の病原体の特徴、その感染や伝播のメカニズム、制圧に向けたさまざまな対策などを紹介し、同時に、熱帯医学研究所の各教室や研究プロジェクトの研究活動、海外拠点の活動をひろく紹介する役割を担ってきました。

第2次世界大戦後の日本は、人類を苦しめてきた多くの感染症の制圧に成功しました。そのことは現在のような「長寿社会」を実現できた要因の一つです。しかし、世界に目を向けると、感染症に苦しんでいる社会は依然として少なくありません。

長崎大学熱帯医学研究所は、熱帯感染症やNTDsの調査研究を進める中で、日本の経験を国際保健やグローバルヘルスの領域で活かし、ケニア、ベトナムなどに開設した海外拠点の活動を通じて、世界の感染症対策に貢献しています。

感染症で亡くなることの少ない「長寿社会」を実現していたため、2020年からのCOVID-19の流行は私たちの社会に大きな影響を及ぼしました。SARS-CoV-2ウイルスの変異やCOVID-19の流行は続いており、私たちはCOVID-19との「共生」・「共存」の社会を生きています。しかし、流行の開始から5年を迎えた2025年の現在、危機感が希薄になり、パンデミックをめぐる記録がなくなったり、記憶が薄れつつあることも事実です。それは、将来的に起こりうるさまざまな新興感染症に対処するための知恵を失うことでもあります。

そこで、「感染症対策をめぐる社会の記録や記憶の保全と継承」のために、熱帯感染症に加え、COVID-19

企画展内覧会の様子（2025年2月21日）

も対象として資料を収集することにしました。

2025年2月25日から8月8日、第1回企画展「ダイヤモンド・プリンセス号の長い航海—記録と記憶の継承と創造」を開催し、COVID-19の感染を私たちに強く印象づけたダイヤモンド・プリンセス号に乗船し、さまざまな経験をした方々が提供してくださった資料の一部を紹介しています（https://www.tm.nagasaki-u.ac.jp/nekken/info/2025/info-2025-02-25.html）。

今後は、常設展示の充実改編を図るとともに、COVID-19などの新興感染症と日本が制圧に成功した地方病（風土病）をめぐる企画展を交互に開催し、感染症対策をめぐる知見の提供、感染症リテラシーの向上をめざす活動を計画中です。熱帯医学ミュージアムのこうした活動は、長崎大学が目標としている「プラネタリーヘルス」実現のための調査研究、啓発活動の一環でもあります。

開催中の企画展の様子

香川大学博物館が「指定施設」となる

香川大学博物館　館長　寺林　優・北條充敏・井上幸恵

香川大学博物館（平成19年4月1日設置・平成20年4月24日開館）は、令和7年3月26日付で、文部科学大臣から、博物館に相当する施設である「指定施設（旧博物館相当施設）」に指定された。

博物館法が約70年ぶりに令和4年4月に大幅改正され、令和5年4月1日に施行されて新たな博物館登録制度へと移行した。今回の改正は、現代の博物館の役割の変容および機能の多様化に対応するために実施され、新しい博物館登録制度では、博物館の運営体制、収蔵品のデジタル化と公開、地域との連携強化など、時代のニーズに合わせた柔軟で効率的な運営と博物館の社会的役割がより重要視されるようになった。（参考「文化庁博物館総合サイト」https://museum.bunka.go.jp/law/）

博物館法の改正は、当館が大学博物館等協議会の会長校を令和3年度および令和4年度の2年間務めた期間中に行われた。その間、文化庁による説明およびヒアリングを副会長校の東京大学総合研究博物館ならびに監査校の北海道大学総合博物館とともに対応した。大学博物館等協議会加盟機関へのアンケート調査を令和3年11月に実施した。その回答から、協議会加盟41機関中、18機関が相当施設であることが分かり、他の23機関は類似施設もしくはその他であった。さらに、大学博物館は一般の博物館と異なることから慎重な対応が必要であるという意見や博物館法改正に対する懸念がいくつも寄せられた。令和4年6月に当館が中心となって主催した大学博物館等協議会2022年度大会では、文化庁企画調整課政策審議係長の上田和輝氏による「博物館法の一部改正について」、文化審議会博物館部会法制度の在り方に関するワーキンググループ委員の塩瀬隆之氏（京都大学総合博物館）による「博物館法改正の論点からみた大学博物館に係る期待」と題する特別講演を企画し、新たな博物館登録制度と大学博物館の位置付けについて、討論ならびに意見交換を行った。

新たな博物館登録制度では、設置主体の限定が撤廃されたが、国と独立行政法人が設置する施設は引き続き登録対象外であり、大学博物館等協議会加盟機関の大多数は対象外のままである。一方で、登録基準が、それまでの外形的な要素から、博物館としての活動の在り方を問う「博物館活動の質保証」に改正された。先述の通り、大学博物館等協議会の加盟館においては多少の温度差があったが、当館では指定施設となることを選択し

て準備を進め、令和6年10月に文化庁に申請し、今回の指定に至った。

申請理由はいくつかある。まず、博物館を登録・指定する側と申請する側の両方からの相談である。香川県教育委員会の担当者から、既に登録されている博物館が、登録博物館としてみなされる博物館法施行後5年間の経過措置期間中に係る登録申請に際し、学術経験者の実地調査等などで協力して欲しいとの相談、他方の香川県内の博物館相当施設から、登録申請するに当たっては助言してほしいとの相談である。前者については、香川県内の登録博物館12館中3館が、令和7年3月13日までに新制度で登録されたが、これまで実地調査は依頼されてない。これらの相談に対応するために、博物館の登録・指定制度について詳細かつ正確に理解しておくことが必要であると考えた。もう一点は、当館には外部評価制度がないことである。平成25年度と平成31年度に科学技術分野の文部科学大臣表彰（理解増進部門）、令和2年度に高松市文化奨励賞（顕彰部門）を当館関係者らが受賞したことで、当館の活動と地域貢献に対しては十分な評価が得られていると判断できる。しかし、当館の運営体制や収蔵品のデジタル化と公開などに対する評価が未だなされておらず、博物館登録・指定制度をもって評価に代えようと考えた。

今回の指定は、当館が文化および教育における重要な役割を担う施設として認められた結果であり、当館の運営体制の安定維持と一層の強化が求められる。これからの博物館には、地域の多様な主体との連携による地域社会への貢献や博物館同士の連携によるネットワーク形成による新たな課題対応が求められている。当館はこれまで、香川大学の研究者や学生による研究成果の発信をはじめとし、地域の歴史や文化を伝えるための企画展や特別展などを地域団体等の協力を得て多数開催し、学術シンポジウム、講演会、ミュージアム・レクチャーなどの学びの場を提供し、地域社会への貢献と学問の発展を促進することを目指してきた。今後も、様々な活動を通じて学びと感動を提供する「大学の窓」としての機能をもつ大学博物館として発展していく所存である。

図1. 第27回企画展「蛾の世界」（会期：2024年7月18日～10月13日）のハンズオン展示を覗く香川大学上田夏生学長

図2. 特別展「景観からみる『高松 海城町の物語』」（会期:2024年10月26日～12月21日）でのフィールドワーク（まちあるき）

企画展「宇宙からの手紙 隕石の発見からはやぶさ2の探査まで」開催

京都大学総合博物館　助教　竹之内惇志

2024年度当館では「地球外物質の研究」をテーマに7月24日から11月3日まで企画展「宇宙からの手紙 隕石の発見からはやぶさ2の探査まで」を開催した。近年我々は隕石の他にも、非常に小さい「宇宙塵（うちゅうじん）」と呼ばれる物質や、天体まで探査機を飛ばして取ってきた「リターンサンプル」といった多様な地球外物質を入手している。現在の京都大学ではそのすべてが分析対象として精力的に研究されており、地球外物質研究の最先端の研究拠点の一つである。今回の企画展では、その様な多様な地球外物質とその研究の歴史にフォーカスし、特に「地球外物質は太陽系の様々な時間・空間の出来事を教えてくれる『宇宙からの手紙』である」という、理学的な側面を強く押し出した展示を実施した。ここでは展示の簡単な紹介と会期中に実施した関連イベントについて報告する。詳しい内容については、Amazonで販売中の展示解説本［1］や当館のニュースレターも参照いただければ幸いである。

展示は大きく4つの章で構成されていた。展示の大半を占める第1章では、まず地球外物質そのものを紹介した。この章では研究者目線で地球外物質を扱った点が特徴的であったといえる。例えば隕石の展示というと、多くの場合は「鉄隕石・石質隕石・石鉄隕石」と大別されるか、それに少し分類が加わるのみのことが多い。一般の博物館・科学館での展示であれば、この分類方法は明瞭でわかりやすく必要十分である。一方、その分類は隕石の成り立ちを考える上では不適であり、研究者はむしろ「分化隕石・未分化隕石・始原的分化隕石」という大分類を用いる。その中には起源天体種毎に更に細かいグループ分けがあり、研究者は少なくともそのグループ単位で隕石を扱う。第1章では研究者以外ではほとん

写真1：各隕石グループの展示の様子

ど耳にすることがない、それらの隕石グループの物質の大部分を網羅し、一つずつ展示・紹介した（写真1）。

第2章では地球外物質研究の歴史的な背景を年表と共に紹介した。隕石が宇宙から来た物質であると認められた歴史的経緯や、日本での最初の隕石研究、1969年という隕石研究の転機について、代表的な標本を示しながら紹介した。また、京都大学における地球外物質研究の歴史の紹介として、その始まりである「岡野隕石」から、最近精力的に研究されている探査機はやぶさ2が持ち帰った「小惑星リュウグウの砂」までを並べて紹介した（写真2）。

第3章は少し毛色を変えて、「鉱物学」と「鉱物の分析」について紹介した。なるべく具体的に研究者がどんな世界を見ているのかを写真と共に紹介し、多くの人に「鉱物の研究」のイメージを持ってもらうことが狙いであった。

最後に、第4章は隕石と人との関わりや日常生活との接点を紹介した。隕石を用いて作成されたと言われている「流星刀（富山市科学博物館蔵）」の展示や、1866年に京都に落下した「曽根隕石」の里帰り展示などを実施した。他にも小惑星衝突からの地球防衛と実際に地球へ落ちてきた小惑星の展示や、当館の屋上で「宇宙塵」を探索したレポートも報告した。

関連イベントとしては、京都大学に現役で在籍する教員達による講演会を実施した。隕石、宇宙塵、リターンサンプルそれぞれの最前線の研究についてわかりやすく紹介した。講演会は当館の展示室にある「ミューズラボ」と呼ばれるすり鉢状の開放スペースにて開催し、演者と来館者の相互のやりとりも活発に行われた。また、株式会社日本電子協力のもと電子顕微鏡の体験会も実施した（写真3）。研究でも利用される小型の走査型電子顕微鏡を展示室に設置し、実際に操作して地球外物質を見てもらうという企画であった。操作画面を他の方にも見えるようにプロジェクターで写して、リアルタイムで解説を加えることで、同時に多くの人が楽しめるイベントであった。夏休み中の平日3日間の開催であったが、多くの方にご参加いただき、特に子どもたちに電子顕微鏡を触る機会を提供できた点は非常に良かったと考えている。

全体的に展示内容の専門性が高かったため、難しくてわからないという声も少なからずあったかと思われる。しかし、この様な専門性の高い展示を企画・実施できるのは、大学博物館の良さの一つでもある。専門性を損なわずにいかに噛み砕いて伝えるか、その最適解を模索し続けることが強く求められていると感じた。本企画展を通して、多くの人に地球外物質について知ってもらい、その研究の面白さが少しだけでも伝わっていれば大変うれしく思う。

写真2：京大博蔵の隕石とリュウグウ粒子の展示

写真3：電子顕微鏡体験会の様子

[1] 竹之内惇志・野口高明・伊神洋平・松本徹・三宅亮・下林典正・大野遼（2024）宇宙からの手紙:隕石の発見からはやぶさ2の探査まで（京都大学総合博物館2024年度企画展展示解説）、クラフティブ電子出版、162頁。（https://amzn.asia/d/7i6vKN2）

大阪大学ミュージアム・リンクスと適塾記念センター

大阪大学ミュージアムリンクス兼適塾記念センター　准教授
松永和浩

本会に加盟する大阪大学の総合学術博物館（以下、MOU）と適塾記念センターは2023年、ミュージアム・リンクス（以下、ML）という新組織の傘下に入った。そして2024年4月24日～6月22日、ML初の展覧会として、令和6年度適塾特別展示／大阪大学総合学術博物館第19回特別展【大阪大学微生物病研究所創立90年・藤野厳九郎生誕150年】「三人の藤野先生、その生涯と交流―升八郎と洪庵、厳九郎と魯迅、恒三郎と遼太郎―」をMOU待兼山修学館にて開催した（図1）。「三人の藤野先生」とは、適塾で学び郷里の在村医となった升八郎、その子で中国の文豪・魯迅の恩師・厳九郎、その甥で腸炎ビブリオを発見した細菌学者の恒三郎（図2）という、藤野家三代を指す。恒三郎は本学微生物病研究所（以下、微研）第4代所長を務め、祖父・升八郎の存在から本学および適塾記念会において適塾顕彰活動に尽力した人物である。

本展開催に当たり、藤野家の地元・福井県および本学所在地の豊中市日本中国友好協会からご支援を賜った。展示は概ね好評で、福井県教育博物館やあわら市郷土歴史資料館にて巡回展が開催され、地域の偉人顕彰に一役買った。なお本展の詳細はMOU叢書22、西川哲矢編著『三人の藤野先生、その生涯と交流―医家に流れる適塾の精神―』（大阪大学出版会、2025年）を参照されたい。

図1.「三人の藤野先生展」入口

ところでMLの使命の一つとして、学内部局の周年事業への協力がある。2024年は微研創立90周年に当たっており、「三人の藤野先生」展はそれを記念した企画であった。2025年秋には、旧帝国大学でいち早く学部として独立した薬学部の創設70周年記念展を計画している。さらには2031年、本学創立100周年を迎えるため、百年史の編纂事業にも、体制を整えるまでの準備作業にMLは主体的に関わっている。

さて、適塾記念センターでは重要文化財である適塾建物の防災体制見直しを2022年から進めている。というのも、2019年にノートルダム大聖堂、首里城と世界遺産の焼失が相次いだことを受け、都市部に佇立する木造建築の適塾がさらされているリスクの大きさが再認識されたためである。竹中工務店の伝統建築専門家の本弓省吾氏の下、①予防、②早期覚知、③被害最小化、④地域共存、⑤記録保存という段階を設定し、着手可能なところから対策を進めている。さらには文化庁の補助金獲得条件となる、改正文化財保護法に基づく保存活用計画の策定を目指している。

図2. 藤野恒三郎愛蔵のカルペパー型顕微鏡（適塾記念センター所蔵）

先端的取り組みとしては、万が一に備えての建物の計測がある。基礎となるのは宮大工による構造の実測調査で、それをフォトグラメトリと3Dスキャンで補完した。フォトグラメトリとは、建物内外の表面をデジカメで撮影して三次元化するものである。これをXYZ軸で形状を計測する3Dスキャンと組み合わせ、3Dモデル（図3）を構築した。2024年4月に計測を行い、9月に公開している（https://sketchfab.com/Tekijuku_UOsaka/models）。３Dモデルは様々な活用方法が想定され、今後の展開を模索中である。

三次元計測に当たって、その経費をクラウドファンディング（以下、CF）にて調達した。2023年10月、阪大CFで提携するレディフォーのプラットフォームを用いて募集し、最終的に1千万円超の支援を受けることができた。近年では文化庁も推奨している通り文化財関係のCFは増えており、募集期間前後には廉塾（福山市）や松井家文書（熊本大学）の修復プロジェクトが立ち上がっていた。筆者はこれらとの連携を求め、相互乗り入れで寄付を呼びかけた。CF成功の鍵は発信力にあり、文化財をめぐるCFプロジェクトの連携は有効な手段と考える。本協議会がそのハブの役割を担うことも期待したい。

CFに賛同する一つの動機に、魅力的な返礼がある。本CFでは「一口城主」ならぬ“一口適塾生”というものを用意した。橋本左内や福沢諭吉が署名した「適々斎塾　姓名録」を模した芳名帳を適塾に設置し、それに一口一万円で署名できるという仕組みである。これには緒方家や門下生の子孫、本学関係者のほか、洪庵を主人公にした小説（『蘭医繚乱　洪庵と泰然』PHP研究所、2024年）を連載中だった作家の海堂尊氏といった著名人も署名した。この取り組みは、一万円札の肖像が変わろうとも、“諭吉一枚で一口適塾生”をキャッチフレーズに、CF終了後も継続している。

ところで、適塾を訪れる方々からこれまで、現地解説を求める声が多々寄せられていた。しかしセンター教員の勤務地やマンパワーの問題から、これまで対応できていなかった。そこへMLの予算的裏付けを得て学生スタッフを採用し、この3月から適塾現地での解説を始めており、参観者からは好評を得ている。さらには彼らの感性・知性を頼んで、HP改善、SNS発信、グッズ開発を進めている。政府が標榜する“稼げる大学”の是非はともかく、現場はその体制を構築できていない現状がある。過去二度のCFの実績や、他の博物館施設の充実したミュージアムグッズの存在を踏まえれば、適塾はグッズ売り上げのポテンシャルを有していると考える。

以上、当センターの取り組みと抱える課題を述べてきた。今年度適塾特別展示では、ここ数年来の企画である「シリーズ生誕200年記念」として、大村益次郎・伊藤慎蔵・箕作秋坪の三者を取り上げる（5月27日～6月8日）。乞うご期待。

図3. 適塾建物の3Dモデル

大学博物館等協議会加盟館の活動状況

東京科学大学博物館

篠原一男と篠原研究室の1960年代
―「日本伝統」への眼差し―

2025年4月19日（土）～5月2日（金）、期間中無休
東京科学大学博物館創立70周年記念講堂　2階ギャラリー、
入場無料

大阪大学総合学術博物館

第21回特別展「松本奉山―水墨画で世界を描く―」

2025年4月26日（土）～6月28日（土）
大阪大学総合学術博物館（大阪府豊中市待兼山町1-20）

大阪大学「適塾」

令和7年度　適塾特別展示
「シリーズ生誕200年記念～その肆　大村益次郎・伊藤慎蔵・箕作秋坪」

2025年5月27日（火）～6月8日（日）
適塾（大阪市中央区北浜3丁目3-8）

国立歴史民俗博物館

第4展示室特集展示
「明治の神道家―旧幕臣秋山光條とその資料―」

2025年4月22日（火）～7月27日（日）
第4展示室　特集展示室

第3展示室特集展示「生田コレクション　鼓胴」

2025年7月23日（水）～8月31日（日）
第3展示室　特集展示室

企画展示「野村正治郎とジャポニスムの時代
―着物を世界に広げた人物」

2025年10月28日（火）～12月21日（日）
企画展示室A・B

第3展示室特集展示
「野村正治郎の後継者―賤男の活動」

2025年10月28日（火）～12月21日（日）
第3展示室　特集展示室

愛媛大学ミュージアム

特別企画展「人新世の到来―人類の未来を決定する2030年までのカウントダウン―」

2025年2月3日（月）～5月10日（土）
企画展示室

常設展「愛媛俳句・文学の風景②～南予・東予の風情とともに～」

2025年3月31日（月）～8月2日（土）
第2常設展示室

企画展示「ドキュメンタリー写真家がみたイスラエルとパレスチナ～第三者の視点から見る共存への道～」

2025年5月19日（月）～7月26日（土）
企画展示室、多目的室

常設展「四国遍路・世界の巡礼研究センター展」

2025年8月4日（月）～2026年1月10日（土）
第2常設展示室

「昆虫展2025」

2025年8月7日（木）～8月11日（月）
企画展示室、多目的室ほか

特別企画展「愛媛からはばたく次世代人材」

2025年9月16日（火）～11月14日（金）
企画展示室、多目的室

常設展「澤田大曉生誕110年記念展（仮）」

2026年1月13日（火）～4月4日（土）
第2常設展示室

※タイトル、期間は、変更の可能性があります。

東京藝術大学大学美術館

相国寺承天閣美術館開館40周年記念
相国寺展―金閣・銀閣　鳳凰がみつめた美の歴史

2025年3月29日（土）～5月25日（日）
本館　展示室1～4

藝大コレクション展2025〈仮〉

2025年10月1日（水）～11月3日（月）
本館　展示室1

第七回公益財団法人芳泉文化財団
文化財保存学日本画・彫刻研究発表展
「美しさの新機軸―日本画・彫刻　過去から未来へ―」

2025年11月22日（土）～11月30日（日）
本館　展示室1

芸術未来研究場展〈仮〉

2025年11月中旬～下旬
本館　展示室3、4

東京藝術大学大学院美術研究科 博士審査展2025
2025年12月9日（火）～12月23日（火）
本館　展示室1～4、陳列館

第74回東京藝術大学卒業・修了作品展
2026年1月28日（水）～2月2日（月）
本館　展示室1～4、陳列館、東京都美術館

集まって住む　元倉眞琴展
2025年6月1日（日）～6月8日（日）
陳列館1階

「不和のアート：芸術と民主主義vol.3」展
2025年6月13日（金）～6月15日（日）
陳列館

日本画第二研究室「素描展」
2025年6月24日（火）～7月7日（月）
陳列館

工芸総合演習2025「Message」
2025年7月11日（金）～7月16日（水）
陳列館

TOKYO Mountain College〈仮〉
2025年7月25日（金）～8月3日（日）
陳列館

うるしのかたち展2025
2025年8月20日（水）～8月30日（土）
陳列館

東京藝術大学日本画第一研究室研究発表展
2025年9月2日（火）～9月11日（木）
陳列館、正木記念館

4芸大染織交流作品展2025『つながる糸ひろがる布』
2025年9月19日（金）～9月23日（火）
陳列館

今村有策退任記念展
2025年9月下旬～10月上旬
陳列館

小椋範彦退任記念展
2025年10月13日（月）～10月26日（日）
陳列館

谷岡靖則退任記念展
2025年11月2日（日）～11月16日（日）
陳列館

ブンポニチ／文保日・展　2025
2025年11月20日（木）～11月27日（木）
陳列館

あらゆる差別や暴力に反対する展覧会〈仮〉
2025年11月30日（日）～12月1日（月）
陳列館

第10回東京都特別支援学校アートプロジェクト展
2026年1月6日（火）～1月18日（日）
陳列館

GA「キュラトリアル実践演習」展〈仮〉
2026年3月19日（木）～4月5日（日）
陳列館

WIP展
2025年7月7日（月）～7月11日（金）
取手館

素材造形「協同プロジェクト成果展」〈仮〉
2025年10月14日（火）～10月24日（金）
取手館

藝大美術館取手収蔵品展〈仮〉
2025年11月13日（木）～11月30日（日）
取手館

京都大学総合博物館

特別展「夢幻のかたち―数理の生み出す美と不思議―」
2025年7月30日（水）～8月31日（日）
京都大学総合博物館南館2階企画展示室

企画展「文化財発掘Ⅻ　模型からみる文化遺産」
2026年3月11日（水）～6月14日（日）
京都大学総合博物館北館2階展示室

東北大学総合学術博物館

特別企画展「南三陸の魚竜化石と大地の生い立ち」
2025年7月19日（土）～10月19日（日）
南三陸町歌津総合支所化石展示室

MUSEO ACADEMIAE 第27号
大学博物館等協議会ニューズレター

発行日　2025年6月19日
発行者　大学博物館等協議会
編　集　北海道大学総合博物館　011-706-3607
〒060-0810　札幌市北区北10条西8丁目